郷土文学館長　新任ご挨拶

令和４年４月に弘前市立郷土文学館長兼弘前市立図書館長に就任した黒滝雅信と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

前職は県職員をしておりました。私は平成 24 年度から５年間、県立図書館に勤務したのですが、県立図書館の２階には県近代文学館があり、本県を代表する 13 人の作家たち（佐藤紅緑、秋田雨雀、葛西善蔵、福士幸次郎、石坂洋次郎、北村小松、北畠八穂、高木恭造、太宰治、今官一、三浦哲郎、長部日出雄、寺山修司）を中心に、本県出身作家、本県ゆかりの作家、そして本県を舞台とした作品などが紹介されています。

そして、ここ弘前市立郷土文学館も市立図書館と併設しており、なにかしら県立と類似性を感じています。

郷土文学館は、明治以降に活躍した津軽の文学者 10 人を選び、その業績を後世に伝えるべく関係資料の収集、保管、展示を行うため、平成２年度に市立図書館と併設してオープンしましました。１階は陸羯南ら９名の常設展と企画展、２階は石坂洋次郎記念室となっていますが、他に弘前を訪れた著名作家の作品や、弘前ゆかりの直木賞作家の紹介など、多様な展示を行ってきました。

郷土文学館がオープンしてから 27 年経過した平成 29 年度からは、㈱図書館流通センター、アップルウェーブ株式会社、弘前ペンクラブの３社の共同事業体による１期５年間の指定管理者制度による運営がスタートしました。そして、今年４月からはその指定管理の第２期目に突入し、さらに充実したサービスをご提供して参りたいと考えております。

そして、郷土文学館には元県近代文学館室長を勤められた櫛引洋一さんが企画研究専門員として勤務しています。さらには、共同企業体であるアップルウェーブ株式会社が運営する FM アップルウェーブでは、ラジオ文学館（昨年度までは「ラジオ図書館」）や「図書館に行こう！」を放送、またフリーマガジン「apli」でもさまざまな情報を発信しています。

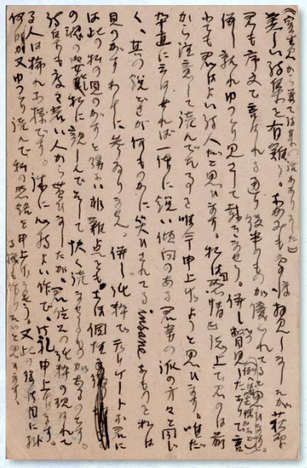
今後とも、市立郷土文学館は、市立図書館及びアップルウェーブ株式会社と連携して、すばらしい企画、展示を行って参りたいと考えております。

今後ともよろしくお願いもうしあげます。

弘前市立郷土文学館（指定管理）館長 黒滝雅信

新資料紹介　福士幸次郎書簡（下谷谷中臥龍館）　竹村俊郎（としお）宛（麻布区我善坊）

スポット企画展「新収蔵資料展」
（令和４年 12 月１日～令和５年２月 14 日）にて展示。



竹村の詩集『葦茂る』（大正８年）の献本礼状か。福士の居住地とも整合性がとれることから、大正８年の書簡と推定される。

「君はよい詩人だと思ひます。私は『感情』誌上で君のは前から注意して読んでた事を唯今申上げようと思ひます。唯だ卒直に云はせれば一体に鋭い傾向のある君等の派の方々と同じく、其の鋭どさが何ものかに災ひされてるinsane*なものを私は見のがすわけに参ゐりません。併し純粋でデリケートな君には此の私の見のがすを得ない非難点をもなほ個性の魂の姿とし私に親しんでそして快く読ませるものがあるのです。」

＊insane［英］正気を失った、常軌を逸した、非常識な

『感情』は大正５年６月から８年 11 月にかけて発行された詩誌である。室生犀星と萩原朔太郎の二人雑誌として出発し、やがて山村暮鳥（ぼちょう）、多田不二、竹村らが参加した。

竹村俊郎（明治 29 年～昭和 19 年）は山形県生まれの詩人で、『感情』には大正６年初頭から参加。沈鬱な心象風景を口語詩創成期らしい韻律にのせて歌い、その点は朔太郎的であるが頽廃（たいはい）の傾きは少なく、知的制御が効いてより調和的である。幸次郎は竹村の詩に現れている「純粋」なものを評価し、７歳年下の若き詩人を激励している。

大正８年、弘前では一戸謙三がパストラル詩社を結成し、幸次郎が指導にあたっていた。中央・地方を問わず、幸次郎が多くの後進を指導・育成していたことが読み取れる。

◆ミニ企画 石坂洋次郎

（於　２階 石坂洋次郎記念室）

「石坂洋次郎の再評価
～三浦雅士『石坂洋次郎の逆襲』」

期間：令和４年 10 月１日～令和５年３月 21 日

石坂作品において、明朗健全以上に重要な特徴とは何か――。

三浦雅士『石坂洋次郎の逆襲』（令和２年・講談社）の内容を中心に、鍵となる三つの作品とともに石坂文学の本質を再考する。

北の文脈ニュース　第 87 号

Kitano bunmyaku news

第 46 回企画展「追憶と郷愁の詩人　一戸謙三」記念対談

青春の美しい夢としてのポエジー　～抒情詩の魅力について

藤田晴央氏（詩人・弘前市）×中嶋康博氏（詩人・岐阜市）

令和４年
８月 20 日（土）
午後２時～午後３時
弘前市立観光館
多目的ホール

◆一戸謙三（等身大パネル）が会場口でお出迎え。

一戸謙三（1899-1979）は、弘前市出身で、大正時代、詩誌『パストラル』に詩を発表。昭和に入ってからは中央詩壇でも活躍するかたわら、方言詩を次々と発表。また、多くの詩誌や新聞等を通して青森県詩壇の主導的役割をつとめた。今回、当館では多岐にわたる謙三の詩業の中から、主として青年期に書かれた抒情詩に詩人としてエッセンスを見出して企画展を開催。これを記念して、ともに詩人であり評論家でもある藤田晴央氏と中嶋康博氏による対談を通して、一戸謙三と抒情詩の魅力について理解を深めた。

藤田晴央（ふじたはるお）…1951 年弘前市生まれ。三好達治、立原道造に代表される「四季派」の抒情詩にあこがれ、10 代のころから詩を書きはじめる。2014 年、詩集『夕顔』で三好達治賞を受賞。元『四季』「立原道造を偲ぶ会」会員。現青森県詩人連盟会長。

対談ではお互いの共通点である「四季派」の詩や詩人との出会いを語り合った。藤田氏は「四季派」の立原道造（1914-1939）の詩「夏花のうた　その二」（1936）を朗読、高校時代に本屋で購入した立原道造の詩集が学生服のポケットにちょうど入るサイズで、昼休みに読んでいたと話した。中嶋氏は第５次『四季』に参加、同人・田中克己の門戸をたたき、詩を書きはじめた。「四季派」の詩人で旧制弘前高校出身の小山正孝（1916-2002）が一番初めに書いたらしい詩篇「夏」（1938）を、恋愛詩でありながら屈折した抒情がよいと評し、青春と抒情のテーマに沿った詩として紹介した。

中嶋康博（なかしまやすひろ）…1961 年岐阜市出身。詩人・田中克己に師事、第５次『四季』同人。戦前抒情詩人の業績を紹介する個人サイト「四季・コギト・詩集ホームページ」開設。自書に『中嶋康博詩集』がある。

次にお互いの詩を一篇ずつ取り上げ、藤田氏は中嶋氏の詩「春のをはりに」（1988）を、中嶋氏は藤田氏の詩「ロッキングチェア」（2014）を紹介した。藤田氏は中嶋氏の詩を今日のテーマにぴったりな詩と紹介、この詩の要である〈咲き残ったこの花〉のフレーズに相手を大切にする気持ちが込められていると語った。一方中嶋氏は藤田氏の詩の中の〈沈黙とはだまっていることではない/沈黙とは/そこにあること/そこにいること〉に、不在を凝視し不在によりそう詩人ならではの対話と感じた、と評した。プライベートを知らない仲でのそれぞれの詩の解釈と背景にギャップがあったことに対して、抒情詩のなかにでてくる〈あなた〉や〈おまえ〉は必ずしも作品の裏にある事実関係と同じではないということで一致した。

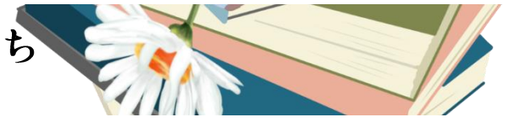
対談のテーマでもある〈抒情詩の魅力〉と一戸謙三について、中嶋氏は詩人で小説家の島崎藤村の代表的な詩「初恋」（1896）を朗読し、〈林檎〉が登場することもあり「初恋」にうたわれた抒情が、弘前の詩人・一戸謙三につながる部分があると指摘。藤村の「初恋」は文語詩であるが、当時の若者にはポピュラーな詩であった。謙三の詩「小さな村」（1926）、「黄金の鐘」（1923）では、〈足長蜂〉〈おはぐろとんぼ〉などの小さな生き物や〈さわら垣〉〈桜〉など風土性・地方の文化を取り上げるなど詩の道具立てに郷土愛があること、また当時、口語詩でこれだけのものを書いたのはすごいと絶賛した。にもかかわらず、謙三はのちの『自撰　一戸謙三詩集』（1965）に多くの抒情詩を入れなかった。このことについて中嶋氏は、すばらしい詩をはずかしがり、身辺雑詩（戦争中の詩）も隠したのは、あまりにも実生活にコミットした求心的な詩だったからでは？と分析。藤田氏も自作を詩集にははずかしくて入れないことはあるが結局は日の目を見ることになる、『追憶帖』（1947）などに光をあてた今回の企画展の意味は大きいと語った。

藤田氏は〈若き日の追憶に郷愁も感じる。抒情詩には、青春を大事にし、輝かしいものにする側面もある〉と話し、中嶋氏は〈抒情詩を多く手掛けた謙三もまた青春の詩人だった〉と結んだ。

藤田、中嶋両氏には現在開催中の企画展「追憶と郷愁の詩人　一戸謙三」開催にあたり、図録での執筆など多大なご協力をいただいた。中嶋氏は３年前（2019）に青森県近代文学館で講演し、もう一度、今度は弘前で講演できることに“縁”を感じたと話してくださった。実は両氏は今回の対談で初対面。互いに詩人であり、一戸謙三の抒情詩に存分に魅力を感じ、共通するところが数々あったが、弘前市と岐阜市との遠距離を埋めるかのように、時に熱く、そして穏やかな語り口調が会場の聴衆らを心地よい雰囲気に包みこんだ対談となった。

スポット企画展　弘前の詩人たち

1960 年代から現代



(2) 泉谷明（いずみやあきら）・小笠原茂介（おがさわらしげすけ）・工藤浩司（くどうひろし）

1930 年代から 1940 年代前半にかけて生まれた 3 名の詩人を取り上げた。

泉谷明（1938～2020）は昭和 38 年、アメリカのビート詩人アレン・ギンズバーグの作品に衝撃を受け深く傾倒。歩きながら、あるいは疾走しながら沸き起こる想念を、極端に長い一行とごく短い一行が交錯する表記の上に再現させる、という独自のスタイルを確立した。中上哲夫、八木忠栄らとともに「路上派詩人」と呼ばれ、その旗手として活躍した。

小笠原茂介（1933～）は詩人・生野幸吉に評価され第一詩集『暁が紅くなるのを』（1969）を刊行。ヨーロッパ文学に精通し、日本の戦後詩の流れの影響を受けること無く、同世代の詩人たちとは一線を画す独自の詩学を築き上げた。

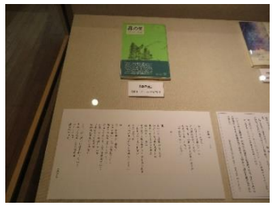
工藤浩司（1943～）は高校時代にカミュ、ランボーなどの実存主義文学に衝撃を受けて創作に目ざめる。先輩に山田尚、泉谷明らがいて詩を書き始める。日常の自然をみつめることで人生への深い思いを表現し、その詩精神に裏打ちされた独自の抒情空間を形成。生きることの重みを伝えるかけがえのない魂の記録となっている。

(3) 福澤公伯（ふくざわこうはく）・船越素子（ふなこしもとこ）・藤田晴央（ふじたはるお）

福澤公伯（1951～1999）は中原中也に深く傾倒し吉本隆明、立原道造や欧米の詩人の影響を受けた。共著を含む 7 冊の詩集を展示。48 歳で生涯を閉じたが、詩「夏の水脈」(『幻の鰐伝説 あるいはわが貴種流離譚へ』1988）など、その多くの詩が追憶に満ちた抒情詩人であった。

船越素子（1950～）は富岡多惠子、アレン・ギンズバーグ、モーリス・ブランショ（思想家）らの影響を受けた。第一詩集『セルロイドの記憶』(1992）から『修繕屋ノオト』(2021）まで 4 冊の詩集を展示。主宰の同人誌『北奥氣圏』(2005～）では、文芸のみならず幅広いジャンルの企画・発信を続けている。

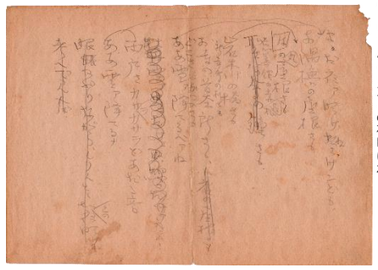
藤田晴央（1951～）は三好達治、立原道造に代表される「四季派」の抒情詩に憧れ、10 代の頃から詩を書きはじめる。第一詩集『毛男』(1978）から『空の泉』(2020）のほか評論・エッセイ集など、10 冊を展示。その作風は紹介した詩「岩木川」(『森の星』1998）など、愛する者や人生についての感慨を自然と交錯させ、清澄な詩の世界をつくりあげている。



企画展展示替え　一戸謙三初公開資料展示

令和 4 年 10 月 1 日より企画展の一部展示替えを行った。初公開資料は①直筆原稿のほか、津軽方言詩「弘前（シロサギ）」の続編と思われる「秋と冬」の草稿である。内容は「お隅櫓の屋根」や「慈善館の赤屋根」など弘前らしいものが盛り込まれている。しかし謙三はこの続編を「未熟なもの」とエッセー「草上庵独語」に書き、発表することはなかった。

②福士幸次郎から謙三宛のフランス語で書かれている書簡は、大正 14 年に板柳町で催された童話と童謡の集いについての内容で、「地方主義運動」の一環と思われることからも貴重な資料である。また、展示室壁面のスケッチ・デザイン画も展示替えした。ぜひ、何度でも足を運んでもらいたい。



雨戸さカサラカサラどあだる音
ああ雪ア降てるナ
まだ夜ア明げね工けンども
ああ雪ア降てるべアね
お隅櫓の屋根さも
岩木川の橋さも
はの丸屋根さも
慈善館の赤屋根
鐘公會の鐘さも
新寺町の杉木さも
お寺の墓所さも、小店の屋根さも
どこさもかつかさも
牡丹雪ア虫だけエね綿コだけアんだね!
眠眠ねふりながら、しりんとしたこの夜明げね
考へて見れば

← 草稿「秋と冬」と ↑翻刻

ロビー展

今年度は企画展と連動し、一戸謙三に関連するロビー展示を行っている。

- スケッチ・デザイン（終了）
- 原稿（11 月 1 日～11 月 29 日）　『津軽方言詩集 ねぷた』原稿のほか関連資料を展示
- 教師（12 月 1 日～12 月 28 日）　教え子による詩「一戸先生の思い出」などを紹介
- 手紙（令和 5 年 1 月 4 日～2 月 14 日）　直筆の手紙を展示
- 絵はがき（令和 5 年 2 月 16 日～2 月 25 日、3 月 7 日～3 月 21 日）　方言詩が綴られた絵はがきを展示

スケッチ・デザインより

開館記念無料開館

令和 4 年 7 月 1 日～3 日　※弘前市立郷土文学館は平成 2 年 7 月 1 日に開館しました。

毎年恒例の開館記念無料開館。今年は企画展の一戸謙三を中心に、郷土文学に関連した各種イベントを実施した。

ロビー展示「南高校生による太宰治研究」

青森県立弘前南高等学校の協力のもと実施。同校で毎年実施している「文型文学探究プロジェクト 2021」の研究記録の展示でテーマは太宰治。全体講師を当館の企画研究専門員が務めた。

目的…青森県の郷土作家とその研究書を題材に、当時の社会情勢や作家の生活状況、人となりについて探究し、現代社会と自己を見つめる。

講評…各班とも、取り上げている内容がとても興味深く、私自身の勉強にもなりました。若い感性の力というものというものを強く感じています。

ワークショップ①「詩であそぼう」

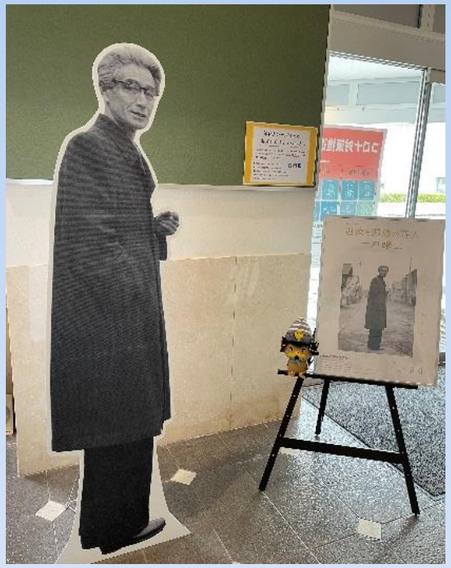
1 枚の紙を本の形にして、カラフルなマスキングテープやイラスト入りのシールで飾るというもの。お気に入りの詩を書いたり、その場で詩を考えたりと、世界にひとつだけの詩集ができあがった。

ワークショップ②「うちわ DE 弘前（シロサギ）」

シールデザインは工藤哲彦氏（版画家）。一戸謙三の方言詩「弘前（シロサギ）」を工藤哲彦氏が版画にしたものを〈光るうちわ〉に貼って完成。用意していた枚数はなくなるほどで、幅広い世代に大人気だった。

来館者の声

- 初めて来たけどおもしろかった。
- クイズラリーをしながらじっくり展示を見ることができた。
- お気に入りの詩人の詩でオリジナル詩集をつくれて嬉しかった。
- 展示もイベントもどれも楽しかった。
- 歴代企画展のスタンプを全部おせる日を楽しみにしています。



今回の無料開館に併せて「一戸謙三等身大パネル」を作成しました。

〈弘前時敏小学校で行われた「徴兵検査」では、五尺九寸一分、体重が十四貫五百匁だったので〉という記述から、謙三は身長約 180 ㎝、体重約 54 kgと背が高くスラリとしていたようです。

この等身大パネルの謙三と一緒に写真を撮り、SNS に投稿してくれた方に記念品をプレゼントしています。企画展終了（～2023.3.21）まで展示していますので、ぜひ写真を撮りにご来館ください。